

『教師のひとこと』

小学校3年生の授業を参観していてハッとさせられたことがあった。

もう「ベテラン」の域に達している教師の算数授業公開で、子どもたちは減法計算の学習をしていた。どの問題も全員が正解で子どもたちは口々に「いいでーす。」を連発し、授業は見事に教師の意図する「ねらい・方向」に到達している。

その時のことである。一人の子どもが自信に満ち溢れた声で、思いもよらぬ間違えた答えを発表したのだ。教室内に一瞬沈黙が走り、声には出さなくとも明らかに間違いをおかした子を嘲り笑うかのような嫌な雰囲気が教室に漂った。

かのベテラン女教師がどう対処するか、私はワクワクしながら見ていた。なぜなら、ここが“ベテランの見せ所”というか“教師の見せ所”となる場面だからだ。が、ベテラン教師の口から出てきた言葉は意外と冷ややかに、『どうして、そんな答えになったの？みんなと違うよね。もう一度やってごらん。』であった。

私が思わず「あれ？」と思ったのは、その先生の冷たい一言もさりながら、その子が計算し直すのを確かめることなく、授業が先に進んでしまったことである。無論、誤答を発表した子のすぐ後に、別の子から正答が出され、例の「いいでーす」の掛け声で教室に活気が戻り、まるで何事もなかったかのように整然と授業は進んでいった。しかし、私は大きな疑問を覚えた。

その後、誤答した子は教師の顔を見ることもなくすっかり無口になり、二度と手を挙げることはなかった。右後列だったその子をそれとなくのぞき込んで見ていると、計算し直しているのではなく、明らかに集中は失せ、ノートの上に静かにエンピツを転がしていただけである。つまり、その段階でその子の思考は完全に停止してしまった。その子は完全に今で言う「キレタ」のである。

「エンピツを転がしているその子に気づかなかったのだろうか？」

「参観者がいたので、誤答にはかまわず計画通り授業を進めることにしたのだろうか？」

「誤答を取り上げると、全員の前でその子の恥を晒すことになるとても思ったのだろうか。」等などと授業後も考えが廻る。

私にも思い当たることがある。研究授業や参観日等では、“できの良い子”を中心に進めたこともあり、身につまされる。いずれにせよ、あの子の心に大きな傷跡を残したことは事実である。どうしてあの子の誤答に至った過程を、クラスみんなで聞いたり一緒に考えたりしてやれなかったのか。

あの子の思考のプロセスには、クラスの誰もが間違え得るという「落とし穴」があったのかも知

れない。かの先生は願ってもない絶好の指導場面を自ら失ってしまったということにならないか、悔やまれてならない。

これからの時代に求められる教育は、スピードやできばえではなく、その子らしさの伸張や一人ひとりに応じた教育の推進であり、結果より探索の過程を重視する教育の推進である。教師であれば誰でも熟知している。ところがどっこい、熟知していることと、実践できることとは大違いなのだが気づかない方も少なからずいる。

そういう意味で、間違っていて自分の考えをみんなの前で発表する子に感謝し、褒め言葉を加える教師こそが「ベテラン」という呼称にふさわしいだろう。

我々の仕事で恐ろしいのは、子どもの心に刻む小さな傷の積み重ねである。黒板の真上の枠取り・太字の『教室はまちがえるところ』という掲示が空々しい。

ベテランと呼ばれる教師こそ、自分の授業スタイルを変えられないものであり、「そんなことは知っている」とばかりに、たとえ校長の指導助言であっても聞き流してしまいかねない。個別化・個性化教育と言われて久しい。教師一人ひとりがしっかりとした教育論を持つことが重大な課題であるとともに、授業改善こそが最大の「教育改革」であることを肝に銘じるべきである。